

## 二十八、如来、聖人とともにあれ

『安心決定鈔』に

「朝な朝な報仏の功德を持ちながら起き、夕な夕な弥陀の仏智とともに臥す。」  
という聖語がある。信心の行者の本当の生活をきわどく表わされた尊い言である。  
信心の行者はまことにこれを生活の上に自証すべきである。

『浄土真要鈔』にいわく

「一念帰命の信心は凡夫自力の迷心にあらず。如来清浄本願の智心なり。……さ  
れば水火の二河は衆生の貪瞋なり、是れ不清浄の心なり。中間の白道は、或時は行  
者の清浄の信心といはれ、或時は如来の願力の道と釈せらる。是れ即ち行者のおこ  
すところの信心と如来の願心とひとつなることをあらはすなり。随ひて清浄の心  
といへるも如来の智心なりとあらはすところなり……」

以上は、他力廻向の信心の世界をまことに明確に表現された御文である。念仏申  
しつつも如来を殺し、聞いたはずで如来を盲にしていた者が、真に生きてまします如  
来が如来と知られた時、永遠に如来の真実のみは盲にすることができないとわかつた  
時、盲にしていた自分の迷妄の相が見えた時、如来に向かつて開眼せられるのであ  
る。その如来への開眼こそ、如来廻向の信心である。本願そのままの信心である。

今日もまた、朝もみ法を頂き、昼も念仏に過ごさして頂き、夜もまた虫の音とともに  
に聖教に親しむ。とにもかくにも、幸なる今日一日であつたことよ。しこうして仏法  
者には明日はない。

煩惱の動き鋭きこと磁石の針のごとく、風に動く水の如し。あるいは荒れ、あるいは  
は静まつて、一念一刹那もとどまらず。

われ、時に、日に幾度となく、熱湯を飲む。世の悲惨を聞いて悲しみ、人の世の矛  
盾に驚いてたまげる。人と人との深刻なる鬭争を聞いて胸を痛め、われにふりかかる  
讒侮ざんぶの聲に眉をひそむ。ただこれ煩惱の動き。

されど、貪瞋の二河の間、如来は、永遠の白道、念仏の一筋道を廻向したもう。念  
仏に立つてはじめて念々の邪妄を知る。邪妄を邪妄と知って、金剛不壊の大信心に蘇  
る時、ほのかに絶対安住の一境を知る。

聖人いわく

「抑又大師聖人源空もし流刑に処せられたまはずば我亦配所に赴かんや。もしわれ  
配所に赴かずんば何によつてか辺鄙の群類を化せん、是れなほ師教の恩致なり。大  
師聖人すなはち勢至の化身、太子又観音の垂迹なり、是の故にわれ二菩薩の引導に  
順じて如来の本願を弘むるにあり」と。

聖人は、勢至、観音二菩薩の引導によりて、念仏門に入りたもうことを喜びたも  
う。

「是れ併しながら、聖者の教誨によつてさらに愚昧の今案をかまへず、彼の二大士の重願だだ一仏名を専念するにたれり。今の行者、錯つて脇士につかふることなかれ、ただちに本仏をあふぐべし。」

勢至、観音の二菩薩の御化身の引導によつて、ただちに一仏名を専念せられ、ただ本仏の弘誓を仰ぐことによつて二菩薩の浩恩を謝したもう。

憶うに聖人は、弥陀本願に生きたもうことによつて、いよいよ聖者の護念証誠を感じたもうたのであつた。脇士は、脇士に事ふることを喜びたまわず、本仏に事うべきことを教誨したまい、本仏に事うる者を護りたもうのである。本仏に帰して、いよいよ聖衆ともなる生活を喜びたもうもの、わが聖人の生活である。われらまた、本仏の真実に徹すべきである。そこにのみ諸菩薩衆の護念がある。

「蓮如上人物を聞召し候ふにも、如来聖人の御恩にてましまし候ふを御忘れなしと仰せられ候、一口聞召しても思召し出され候ふ由、仰せられ候ふと云々」(『御一代記聞書』)

これは蓮如上人のご信境であつた。食物を一口聞召すまでに、如来、聖人の御恩を感ぜられる上人であつた。

ご恩を感ぜらるるは、聖人の説きたもうみ法を聞き獲たまいしがためである。しこうして聖人は、み法を生きご恩を喜ぶ行者の住む所にのみいたもうのである。上人は聖人とともなる方であつた。

「我が歳きはまりて、安養浄土に還帰すといふとも、和歌の浦曲のかたを浪の、寄せかけ寄せかけ帰らんと同じ。一人居て喜ばば二人と思ふべし。二人居て喜ばば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。」

我なくも法は尽きまじ和歌の浦

あをくさ人のあらんかぎりは

これは、聖人の「御臨末の書」と言われるもので、とかくの問題のある書ではある。しかし聖人のみ法に生きる遺弟たちの心の中には、その生活の上には、「その一人は親鸞なり」と聖人が生きたもうてある。これ真宗念仏行者の念仏生活である。

天親菩薩、『浄土論』を著したもうにあたり、その巻頭一番「世尊、我一心」と釈迦牟尼世尊の名をよびたまひ、曇鸞はこの意を釈して「夫れ菩薩の仏に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して動静己に非ず、出没必ず由あるが如し。恩を知り、徳を報ず。」と解したまい、天親論主が「普く諸の衆生と共に浄土に往生せしめたまへ」と願じたもう所願の軽からざるを謂い、この故に

「もし如来威神を加へたまはずば将に何をもつてか達せんとする。神力を加へたまはんことを乞ふ、所以に仰いで告げたまへり。」

と説いて、天親論主が「世尊我一心」と世尊の名をよびたもう所以を示された。まことに天親菩薩は開口一番「世尊よ」と告げて、釈迦牟尼仏との九百年の隔りを超えて、無量寿経を通して、現前の教主善知識に会いたもうたのである。

善導大師は二河白道の譬喩において、彼岸に教主弥陀の招喚を示したもうとともに、現実此岸に、「既に此の道有り、必ず度るべし」と、「此の念を作す時、東岸に忽ち人の勧むる声を聞く。」と、教主世尊を発見すべきを示したもうた。まことに白道に足をかけざる者には、けつして東岸の教主世尊、善知識を知り得ない。しかしながら、白道を往生する一念の時、初めてわれらは現実の二尊に会うのである。二尊まします生活こそ、具体的な念仏白道の生活である。

天親、曇鸞、善導など、みな、釈迦弥陀二尊に摂取され、護念されて生きたもうのである。

「釈迦弥陀は慈悲の父母」念仏の子には、血の一なる父母がある。常に内より摂取し、外より護念したもう親がある。

親ともなる生活。かかる親ともなる生活こそ、念仏行者の生活であつた。念仏行者の生活のすべては、ただみ親の教えから、本願から生まれてくるのであつた。

超世の本願を発したもう法蔵菩薩は、世自在王如来の教化の前に誕生したもうたのである。長跪合掌して仏足を稽首したる法蔵は、「光顔巍巍々として威神極り無く、是の如きの燦明、与に等しきもの無し………」と如来の徳を讃嘆したまい、やがてその発願求仏の意を述べたもうた。世間自在王如来は、法蔵の願を聞き、その志願の高明深広なるを知り、二百一十億の諸仏の浄土を説き、現じてこれを与えたまい、法蔵菩薩は、五劫思惟に入り、莊嚴仏国、清浄の行を摂取されたのである。

われらは、師弟一如の境に住して、五劫に対座して、同一なる、選択本願、選択浄土に生きたもうところの大経の五劫思惟の文を憶う時、嚴肅尊重なる感銘に打たれざるを得ない。五劫にわたつて、師弟一如の世界にあつて、選択摂取したもう本願の世界の尊いことであることよ。

法蔵菩薩は合掌して、寂靜にして何ものにも所著なき境において、如来の教えのままに、願を発したまいて、教えと相応せんとしたまい、如来は、教えを説いて法蔵をして無上の本願を發起せしめ、その願をして法性に随順し、教えのごとくならしめずばやみたまわず、ついに師は弟子に生き、弟子は師に生き、一如一体になつて、弟子は選択成就し、師は讃嘆し、証誠したもう。

かくして法蔵はその師仏とともにあり、やがて、法蔵菩薩の本願に生かされるものにもまた、必ずその名号を説きたもう教主善知識まします。

われはまたしても師弟対座の五劫の思惟を憶う。

師ましまさぬ人生に光はない。

師ましまさぬ生活に力はない。

師ましまさぬ一日に進展はない。意義はない。喜びはない。

世尊よ。聖人よ。

猫に師なく、犬に道なし。

人に学ぶことあり、師ありと言うも、多くは相対的意味であつて、深き人生の悩みに会い、孤独の運命に泣く日、はたして真の師があるであろうか。

人生の根本的意義について考える時、はたして第一の問題について切々と答うる師があるであろうか。

多くの人は、かかる意味における師を求めているであろうか。

しかるにわれらは何たる幸福であろうか。

大蔵経ましますわが書齋に世尊あり、七祖あり、聖人あり。終日わが部屋にあつて、静かにペンを走らせ、經典聖教に向かう時、そこには必ず聖人ありて、われに教えたまはう。

汽車に乗るとも、船にあるとも、ついに聖人は離れたまわず、われを教え、われを護念し説諭したもう。不思議なるかな。不可思議にもまた尊き縁なるかな。

み光に向かう時、わが心のありのまま鏡に映るがごとく、欺くに由なく偽るに術なし。

み名を念ずるわれに、前に如来ましますし、後に如来まします。八方十方正面にして、法界の中心、一塵かくすことなし。如来のみ光の中であり、仏祖善知識のご面前である。

ああ。ついに念仏生活は如来聖人のご面前の日暮らしである。

如来聖人のご面前における念仏生活であることを思う時、われはただ一塊の煩惱業報の凡夫にすぎない。それゆえにただ合掌して頭を大地に下げて、本願の救いを仰ぐよりほかに道はあり得ない。

われはただ、三毒の罪体なるに、不思議なるかな、合掌念仏すれば、この心安らかにして、肩に微塵の荷物あることなく、ただ念仏に満ち足を知る。生きる力を知る。

仰ぎ願わくばわが同胞よ。如来聖人のご面前における生活を成就しよう。如来なく、師なき生活は、三毒の自堕落ではないか。

静かにわが過去をふりかえる時、如来聖人を見失い、ただ一人のさばり歩いたる時、何がそこに生まれていたか。

如来聖人を見失いたる念仏は、すでに二乗である。念仏の消えぬ間に、毒舌悪言ほとばしり出て他人を傷つけてしかもそれを知らぬであろう。

み法を説きつつその中に誹謗正法の毒刃をふるい、しかもそれすら知らないであろう。恐るべし。悲しむべし。

如来、聖人は大慈悲にてまします。けれども、われ、人生の苦悩に泣きつつその袖にすがりて甘えんとするも、聖人はましまさず。語るも答えたまわず。貪欲に対して教えたまわず、瞋恚愛憎に味方したまわず。

如来聖人はただ、大法にてまします。南無阿弥陀仏にてまします。

されど、いかなるわれをも棄てたまわず、必ずわれをして正しき領解を得しめたま  
い、行き詰まりたる胸を開き、暗く悲しき心を照らしたもうのである。しかもそれは  
ただ、大法においてである。

「世尊の大悲は大法となつて流れる

されば大法に生かされてのみ

世尊の大悲の真実を知る

汝、もし放逸無慚にして、大法を離れなば

悪魔怨敵汝を滅さん

世尊の大悲はただ大法なり

衆生の寿命はただ大悲なり

大法を拒む者は大悲を拒むなり

大悲を離れなば冷き運命の波浪汝をのまん。」(「聖光」九月号巻頭言)